氏　　名　藤澤晨一（ふじさわしんいち）

学位の種類　医学博士

学位記番号　論医博第796号

学位授与の日付　昭和54年5月23日

学位授与の要件　学位規則第5条第2項該当

学位論文題目　Long-term follow-up study of idiopathic nephrotic syudrome in childhood
—correlation between long-term prognosis and renal histopathological findings—
（小児特発性ネフローゼ症候群の長期追跡研究
—長期予後と腎組織所見との関連—）

論文調査委員　（主査）教授 濱島義博　教授 太藤重夫　教授 奥田六郎

論文内容の要旨

ステロイド剤（以下ス剤と略）により治療を受けた小児特発性ネフローゼ症候群（以下ネ症と略）の長期予後に関する報告は多いが，腎組織所見の判明した症例の，しかも，10年以上の長期予後の報告は非常に少ない。

本論文では，昭和33年から昭和53年までの21年間に観察した小児特発性ネ症のうち，腎生検を行った計79症例について，腎組織所見と予後，特に長期予後との関係について検討した。

1) 対象：ス剤による計画どおりの治療を行ない，かつ最低6カ月以上観察した症例に限定した。追跡調査10年以上50症例，15年以上15症例あった。男女比は，約3：1であった。

2) 腎生検組織所見：腎組織の光顕分類は，小児腎国際研究班の分類に準じた。minimal change 49例（62.0%），mesangial prolif. GN.，16例（20.0%）と，両者が大部分を占めたが，その他 focal glomerulosclerosis（5例），MPGN（3例）および focal GN., sclerotic type と membranous nephropathy が各々2例づつみられた。

発症年齢5歳以下の症例の大多数（32例中26例）は，minimal change であったのに反し，mesangial prolif. GN. の症例は，すべて発症年齢5歳以上であった。

3) 予後：表Ⅰ（別冊）の如く，一定の判定基準を定めて，各症例のス剤治療効果および予後の判定を行った。ス剤投与開始から，6カ月，1年，2年，5年，10年および15年の時点で判定した。
minimal change 群と mesangial prolif. GN. 群を比較すると，後者，特に血尿を伴った症例におけるス剤近接効果は，前者に比し明らかに不良であった。

しかしながら，10年以上の長期予後に関しては，両群共，同じように良好で，各々86.9%および84.6%が完全寛解を示した。これに反し，他の組織所見群のス剤治療効果および予後は，全般に不良で，とりわけ，sclerotic type と MPGN の長期予後は不良であった。

以上のように，小児特発性ネ症の長期予後と腎生検組織所見とは，よく相関し，腎組織の検索は，

ネ症のス剤治療効果および予後の判定に非常に有用な手段である事を確認した。

4) 再発：ス剤反応性ネ症には，しばしばみられるもので，10年の経過中，1回も再発をみなかった症例は，29.4%にすぎなかった。しかしながら，再発は思春期に入ると徐々に減少するようで，我々の症例では，19歳以上で再発のみられたものはなかった。

5) 社会復帰と妊娠：既に24例の患者が現在20歳以上の年齢に達している。22例は，minimal change 群あるいは mesangial prolif GN. 群で，1例以外はス剤投与も受けず，完全に社会復帰し，正常の生活を行っている。そのうち4例は，妊娠し，健康なベビーを出産した。sclerotic type の1例と MP GN の1例は，なお無効群であった。

6) 死亡：死亡例は，79例中3例（3.8%）にみられた。1例は尿毒症による死亡であったが，他の2例は，腎以外の原因によるものであった。

以上のように，少なくとも，腎組織所見の変化の少ない大多数の小児特発性ネ症では，治療開始後10～15年経過すると，ほとんどの症例が完全寛解に入ってくるという結論を得た。したがって，これらの症例に対しては，たとえ，かなり再発をくり返す症例やス剤不応性の症例であっても，薬剤副作用の軽減，身体および精神両面にわたる社会復帰をも十分考慮した長期間のねばり強い治療計画を持つことが大切であると考えられた。

論文審査の結果の要旨

小児特発性ネフローゼ症候群の腎組織所見と10年以上の長期予後との関係を40例程で検討した報告は内外を通じ一編しかない。本論文は，京大小児科で過去21年間に観察した本症79例につき，腎組織所見と予後，特に10年以上の長期予後との関係を明らかにすることを試みた。腎生検組織分類は国際小児腎臓研究班に準じた。腎組織が微小変化群やメザンジウムの増殖性糸球体腎炎所見を示す症例の長期予後は良く，治療開始から10～15年経過すると約85%が完全寛解に入り，社会復帰が可能（20歳以上の4例の女性は妊娠，健康児分娩）であった。発症当初の腎組織所見と長期予後とはよく相関した。再発は，思春期以降減少し，19歳以上の症例はなかった。一方，硬化型や膜性増殖性腎炎像の予後は不良であった。死は3例（3.8%）にみられた。

以上の研究は，小児特発性ネフローゼ症候群は，初期に腎生検組織の精査，適切な治療を行うことが長期予後のために極めて重要であることを，follow-up study によりはじめて明らかにしたものである。

よって，本論文は医学博士の学位論文として価値あるものと認める。